慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	反抗と絶望の黒人作家 : Richard Wright
Sub Title	The Negro writer Richard Wright's protest and despair
Author	安原, 基輔(Yasuhara, Motosuke)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1955
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.4, (1955. 2) ,p.105- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00040001-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

反抗と絶望の黒人作家—RICHARD WRIGHT

安原基輔

1

第二次世界大戰直前に.début した一群の米國作家中、もつとも天分にめぐまれたひとのひとりに黒人作家 Richard Wright (1908-) がある。もうひとりの、そして、Wright 以上に藝術的な作家に Eudora Welty (1908-) がある。しかし、この南部の閨秀作家は長篇よりも短篇に長じ、Wright とはその作風、思想傾向が非常にちがつてゐる。ここでは藝術性の問題よりも、現代米國のおほきな宿題の一、黒人問題をのぞいてみたいので、Welty よりも Wright の方をとりあげることにした。

Richard Wright は少年時代から naturalism の小說を愛好してゐて、Sinclair Lewis, H. L. Mencken にも影響されたが、その作風は Chicago の先輩 Dreiser, Dos Passos, Lardner, Farrell, の系統をひく naturalism を基調としてゐる。かれが社會惡をいきどほり、その醜惡面をきはめて劇的な面においてとらへて、殘忍なほどの筆致をもつてそれを描出しなければ我慢しえないところは、1930 年代の他の naturalism 作家、特に James T. Farrell にちかく、Farrell 同樣、かれの創作態度もまたあまりにもひたむきであるために、できあがつた作品は、Dos Pasoos ものの徹頭徹尾理智的なのとは、まつたく對蹠的な印象をあたえる。Wright の作品をよんでみると、かれ生得の激情が naturalism のつめたい外殼のなかでにえたぎつてゐて、その激情はしばしば奔騰しすぎて、メロドラマ的要素となり、作品の藝術的價値をひどくきづつけることがすくなくない。Richard Wright を第一級の大作家とみなすこと

はできないけれども、かれがすぐれた才能の所有者であること、すくなくとも、黑人最初の本格的作家であることは事實で、黑人文學はかれによつてはじめて藝術的價値を附與せられたのであり、今日かれの作品は單に米國內だけでなく、ひろく世界全般の注意をひいてゐる。

米國の黑人作家といへば、すぐ Paul Laurence Dunbar (1872-1906) がおもひだされる。Dunbar 以前にも若干の詩人や評論家のなまえがしられてをり、無名詩人の作品の集積した黑人靈歌 (spirituals) もあるが、專門の詩人、作家としては Dunbar 以前のものは問題にならない。Dunbar はやはり「黑人文學のちち」といふべき存在で、Richard Wright が第一次世界大戰およびその直後の黑人の第二の發展期に生長した世代の代表者であるのに對して、Dunbar は南北戰爭の結果擴充せられた黑人教育の恩惠に浴した最初の世代、黑人の發展第一期に生長した世代の代表者であつた。したがつて、Dunbar の作品はいまだ幼稚で、かれの詩が William Dean Howells の注意をひいたのは、それらが黑人方言でかかれた、黑人の作品であつたことがおほいに關係があらう。標準英語による詩集は好評を博さなかつたし、かれの小說は Joel Chandler Harris の Uncle Remus ものの域を一歩もでることができなかつた。

Dunbar と同時代には、ちよつとした詩人で外交官の James Weldon Johnson (1871-1938) がゐたし、小說 *The Conjure Woman* (をんなてじな師) の作者 Charles W. Chestnutt (1858-1932)、小說 *Banjo* その他でしられる Claude Mckay (1890-) や、Keats ばりの詩人 Countée Cullen (1903-46) らの詩人、小說家がゐて、Dunbar から Wright へのはしわたしをしてゐるが、かれらはいづれも獨創力が不足してゐて、あたらしい型式や人物を創造することができず、今日まで黑人に取材した重要作品の主要人物はすべて白人作家のてになつたものであつた。すなはち、Harriet Beecher Stowe の Uncle Tom の實直、敬虔型、前記 Harris の Uncle Remus の素朴、明朗型、それに Julia Peterkin (1880-) の *Black April* (くらい四月) (1927) や *Scarlet Sister Mary* (紅衣のメリー) (1928) にでてくる Gullah Negroes の多淫型が文學にあらはれた黑人の主要 types であつた。そして、一般にはいつのまにか、黑人は知能指數はひくいが、善良、溫順で信心ぶかく、愛敬たつぷりであるか、さもなくば體臭がつよく、劣情が發達した劣等人種であるとの偏見が成立した。推理劇や映畫にでてくる黑人は、この常識にもとづいて、滑稽感や怪奇味をだすために利用せられてゐるこ

とは、衆知のごとくである。Richard Wright はこのやうな誤解や型式化に反對して、黑人かならずしも劣等ではなく、黑人にも相當の自尊心がある。それで白人がいだいてゐる人種的偏見、かれらが意識的、無意識的に黑人にあたへる不平等待遇が、黑人の性格を歪曲し、黑人の犯罪を兇惡化して、その被害者は黑人だけではない。白人もまたかれらが自覺してゐる以上に被害者となつてゐることを、みづからの體驗にもとづき、黑人のがはから描出してみせ、米國の有識者に警告をあたへたのである。そこに Wright の作品の文學を超越した價値がある。

2

Richard Wright は Mississippi 州 Natchez 近傍の農場 (plantation) のさくをとこ (farm-hand) の兒として生まれた。かれの父は白人(人種名未詳)とインディアンと黑人の血統をひいた、ごく平凡な農夫で、[1] Richard がまだ學齡にも達しない幼時に、つまと二人のむすことをすてて、他のをんなのもとへはしつてゐる。Richard は後年父が小作人 (sharecropper) としてはたらいてゐる農場に父をたづねて、失望したことをしるしてゐる。[2] これに反して、かれの母は Irish, Scotch, French といつたラテン系の白人の血に、黑人の血のまじつた、非常にしつかりした女性で、[3] おさない Richard に動物愛護、弱者庇護、獨立自守、不屈の精神をたたきこんだ。Richard の文才はこの母にはぐくまれ、生長したもので、かれは幼年時代から記憶力がきわめてつよく、感受性がするどく、想像力がひと一倍ゆたかであつた。かれの自叙傳 *Black Boy* (1945) には、これらの事實を證明する興味ふかい、いくつかの挿話がしるされてゐる。

1. Wright, Richard: *Black Boy*, Chapt. II, p. 63, Cleveland, The World Pub. Co., 1950.
2. *Ibid.*, Chapt. I., pp. 46-7.
3. *Ibid.*, Chapt. II., p. 63.

このやうな俊敏、多感な少年がおさなくして父にすてられ、おとうととともに母のほそうでにやしなはれ、うえとさむさのくるしみをしり、しかもその母さへも過勞のために腦溢血でたほれて、母子三人がそれぞれ近親にひきとられ、別々にくらすことになり、相當以上の辛酸をなめたことは、まことに不幸なことであつた。

しかし、かやうな家庭的不幸は決してめづらしいものではなく、作家にとつてはむしろ貴重な體驗となるものである、が少年 Richard の順調な精神的發達をさまたげたものは、南部諸州における黑人蔑視、差別待遇であつた。これらの諸州においても、幼兒のあいだには疎隔はない。黑人のうばは支障なく白人の幼兒に授乳できるし、農場では黑白兩人種のこどもが喜々としてたはむれてゐる。それが少年期にはいつてから、傳統の惡靈におしえられて、黑白兩少年があひ反目するやうになり、黑人少年がなかまづきあいの條件として、白人に對する反感のつよさをテストするやうになり、黑白兩少年間に集團的喧嘩がおこつて、負傷者がでるやうになる。その經過は *Black Boy* にもよくゑがかれてゐる。Wright もまた左樣な喧嘩で負傷して、外科醫のてあてをうけたことがあつた。またかれのおぢの一人は、その家業の盛大なのを嫉視せられ、白人にいひがかりをつけられて、射殺せられたうえに、家產全部を沒收せられて、遺族がたちまち路頭にまよふやうになつたこともあつた。また第一次大戰當時、黑人の經濟的進出、擡頭がはじまると、白人種との摩擦がはげしくなつて、各種のいまわしいうはさが Wright のみみにはいるやうになつた。

Richard が小學校をおへて就職したのちには、この差別待遇の弊害が直接かれにおそひかかつてきた。かれは俊敏で、自守的な黑人少年であつただけに、せけんのかぜあたりがひどかつた。かれの人相が主人の氣にいらなかつたり、用語が不遜であるといふやうな馬鹿げた理由で馘首せられたこともあつた。米國南部の社會がかれに課した Jim Crow 教育[4]の不合理、非人道性は、少年 Richard の骨髓に徹して、わすれらないものであつた。これがかれの後年の性格、すくなくとも作品の傾向に多大の惡影響をのこしてゐるので

4. Thomas Rice 作の minstrel show のなかの歌曲 (1830) に由來し、元來黑人一般の呼稱であつたが、黑白兩人種の差別を目的とした法制、教育萬般をさすために使用する。

ある。

Richaad Wright は比較的自由な北部、Chicago への移住を最大念願とし、それを實現したいばかりに、映畫館の入場料を詐取する不良に加擔することを辭せなかつたし、また後年その經驗した實例のいくつかを *Uncle Tom's Children* の卷頭にまうけた "The Ethics of Living Jim Crow" (黑人處生訓) の一章において略述したうえに、さらに自叙傳 *Black Boy* において、再度それを問題にしてゐる。いな、かれの全作品ことごとくが Jim Crow-ism に對する抗議であるといふても過言ではない。*Black Boy* にかたられた事實こそは、こころある白人讀者にとつては實に驚嘆すべく、戰慄すべきことで、Maxwell Geismar の言をかりていへば、"the horrors one could tolerate in the life of a fictional hero, one could hardly accept in the actual life of an ordinary citizen."[5] (小說の主人公のばあいには我慢できるおそろしい事件も、實在の普通人のばあいとなると、ほとんど信じられない) ことである。

Richard Wright は 1925 年末以來一時 Memphis へうつり、母と弟とをむかへたが、のちにおばの Maggie もころがりこんできて、生活に支障をきたした。そこでかれは單身 Chicago へのりこんで、收入增加のみちをひらいてから、一同を同地によびよせ、以後郵便局ではたらくかたはら、獨學をつづけた。

Richard Wright が共產黨いりをしたのは、1930 年の不況時代の流行のなみにのつたのではなく、共產主義が人種、宗教の相異よりも階級差を重視して、貧民と被壓迫者の解放をむねとするのに共鳴したためであつて、"Mabbe ef five er six thousan of us marched down-town we could *scare* em (white folks) doin something! Lawd, mabbe them Reds *is* right!"[6] (わしらが五千人か六千人下町でデモをやつたら、多分やつらをこはがらせて、なにかやつてくれるやうにさせられるかもしれん。ああ、赤い連中のいふことがただしいのかもしれんて) といふ the Reverend Taylor のそれとにたやうなきもちから、かれは共產黨にひきつけれたの

5. Geismar, Maxwell: "A Cycle of Fiction", pp. 13, 15, being Chapt. 77 of *Literary History of the United States* (ed. by R. E. Spiller, et al.), New York, The Macmillan, 1953.

6. Wright, Richard; "Fire and Cloud" in *Uncle Tom's Children*, p. 108, New York, The New American Lib., 1949,

であらう。しかし、共產黨の個性無視、黨第一主義は到底 Wright の我慢しうるところではなかつた。かれは 1944 年 "The God That Failed" といふ一文を發表して、10 年間關係し、おほいに貢献もした共產黨と絕緣し、1946 年には一家をあげて Paris へ移住した。(この間の事情未詳。)

3

自叙傳によると、Wright の處女作は、Jackson の地方紙 *The Southern Register* に發表せられた "The Voodoo of Hell's Half-Acre" (いなか町の邪教) といふ短篇であつたが、[7] それはまだ小學生だつた Wright が、感興のわくままにかきなぐつた小品で、"crudely atmospheric, emotional, instinctively psychological, and stemmed from pure feeling."[8] (未熟な氣分本位、感情的な作品で、直感的に心理分析をした、純粹な感情によつてできた作品) であつた、と作者自身が後年自分で批評してゐる。

單行本となつた最初の作品は *Uncle Tom's Children* (トムさんの子孫)(1938) で、Wright はこの短篇集によつて Story Magazine 賞を授與せられた。のち 1940 年に一篇を追加して、五篇にしたが、第一の "Big Boy Leaves Home" (ビック・ボーイ離鄕す) は手法が未熟で、前半はだらしがないが、後半リンチを描寫するところになると、急にみちがへるほど手法が正確になり、stream of consciousness による心理描寫も巧妙である。しかし、メロドラマに墮してゐて、後年の Wright の長所短所がすでに併存してをり、かれの將來を象徵したやうな作品である。

これに反して、第二の "Down by the Riverside" (河畔にて) は佳作である。黑人 Mann は洪水の濁流にとりまかれた貧乏家

7. Wright, Richard: *Black Boy*, Chapt. VII., p. 191. 表題は Arizona 州の San Carlos の別名 Hell's Forty Acres をもつて地名を案出したものかともおもはれるが、原文をみないので、眞の意味は不明。
8. *Ibid., loc. cit.*

に、數日來產氣づいたままで、いまだに分娩しない妻女とむすことつまの老母と產婆の四人でのこつてゐる。この洪水は意志のよわい主人公を飜弄する運命を象徵する。弟の Bob は山羊を賣却して、その代金でボートを購入する目的ででかけたが、代金がやすくて、ボートが入手できなかつたので、郵便局長 Heartfield のボートをぬすんでかへつてきた。盜品を使用するのはこのまないが、一刻の急を要するとき。やむをえず、Mann はそのボートで妻とむすこと老母を病院へはこぶ。途中、運わるく郵便局のまえをとほりかかつて、まだ避難できないでゐた Heartfield にボートをみつけられ、拳銃をあびせられた。Mann はそれに應射して、あひてを射殺した。やつと病院へたどりついたときには、妻女はすでに死亡してゐて、Mann はボートとともに徵用せられ、堤防での防水作業につかはれた。その堤防缺壞後、かれは病院の患者、職員の救助に活躍し、最後に命ぜられて、Heartfield の遺族を救出したが、むすこの Ralph Heartfield がかれをおぼえてゐて、告發した。そこで Mann はとらへられ、訊問をうけ、處分保留のまま拘禁せられたが、リンチにあふのをおそれて脫出をはかり、衞兵に射殺せられた。

このものがたりにおいては stream of consciousness による獨白型式の心理描寫が威力を發揮して、その黑人方言による短文が急迫した情景をよく讀者の映像にうゑつける。メロドラマに墮してゐないのがよい。

しかし、全篇の白眉は第三の "Long Black Song" (黑人長恨歌) であらう。Sarah は良人の Silas が農作物賣却へでかけた不在中、行商の白人青年の誘惑にまけた。その直後主人が歸宅して、青年がおとしていつた所持品から Sarah の不行跡をみやぶつて、かの女を戶外におひだした。翌朝その青年がつれと二人で註文をとりにひきかへしたとき、Silas はその青年をころす。他の一人が應援をもとめにいつたあいだにかへつてきた Sarah が逃亡をすすめたけれども、Silas はその忠告にしたがはず、白人のむれとピストルをうちあつて、やけおちるわが家のしたじきとなつて燒死した。Sarah は附近の丘上からその樣子を望見してゐて、最後に Naw, Gawd! (いけません、神さま) と一言いひのこして、むすめをかかへてどこともなくはしりさつた。

このものがたりの最初の部分は、Sarah が結婚前の愛人の抱擁の感觸などを想起して、わびしいきもちになつてゐる夕方の描寫で、かの女が一面識もない白人青年の誘惑にまけるまでの自然な推移を描出しえて、妙である。Silas がかえつてきて、Sarah の愛人であ

つたをとこの凱旋したうわさをはなすところも、Silas の無意識的な嫉妬を表現して、あとの感情の爆發への準備ともなつてゐる。輕薄でもろい Sarah に反して、また Mann のやうな運命に飜弄せられる、薄志弱行のをとこともちがて、Silas は着實勤勉、刻苦精勵して、白人なみの自作農になりあがつたのである。Sarah の不品行によつて、かれはそのよつてたつてゐた土臺が崩壞したやうにおもつた。かれは憤怒と失望のあまり、あひての白人青年を射殺せねばをられなかつた。良人が自暴自棄となり、みづから死をもとめてゐるのを、妻女ははるか丘上から望見してゐるだけで、最後にはにげだしてしまふところに Wright の女性觀がよくでてゐる。一體かれの作品中の戀愛は、つぎにのべる短篇 "Bright and Morning Star" の Johnny-Boy と Reva のばあい以外は、すべて官能の滿足の手段以外のなにものでもない。女性の方にはあひての幸福を希求するきもちが若干あつても、男性の方にはそれがない。あひての一生の幸福、いなその生命をうばふ直前または犯罪の直後に平氣で肉體關係をむすぶのである。このばあいあひてのをんなに對する愛情はないことはないのであるが、それには格別精神的なものがともなつてゐないのが普通である。したがつて、Wright の描出した女性はいづれも平凡で、この娼婦がたの Sarah 以外は讀者にあたへる印象がきはめてうすい。そして Sarah の性格描寫がうまくいつたのは、男性と女性とを倒置して、ゑがいたためであるといつても過言ではあるまい。

第四の "Fire and Cloud" (火と雲) は一黑人牧師が、町の有力者にそむいて、教區の貧民とともにデモをおこなひ、貧民救濟物資の獲得に成功するはなしで、共產主義の色彩の濃厚な最初の作品であるが、できはあまりよくない。

第五の "Bright and Morning Star" (あけの明星) もまたイデオロギーの露骨にでた作品である。これは第一次大戰當時 Wright がきいた實話[9] を脚色したもので、母と子とが生命をすててまで黨の秘密をまもりぬくはなしであるが、ここにもまたリンチの非道、殘忍な情景が刻明に描出せられて、作品の藝術的價値をおとしてゐる。Tolstoy の「闇の力」でもさうであるが、なにかイデオロギーを宣傳する意圖があると、作者は必要以上に殘忍な情景をことさらにもとめるもののやうである。主人公の黑人青年を白人のむすめが

9. Wright, Richard: *Black Boy*. Chapt. II., p. 89.

愛してゐるのは、一部の白人讀者には非常に不愉快なことであらう。

4

Richard Wright の最初の長篇小說 *Native Son* (土地っ子) (1940) は thriller の形式をとつたもので、少年院にもはいつてゐたことのある黑人青年 Bigger Thomas が、黑人救濟委員會の世話で、Chicago の富豪の家に運轉手としてすみこんだが、そのおめみえの夜、あやまつて令孃を窒息死させ、それが發覺すると、情婦と逃亡をはかつたが、警察や自警團の追究が急で、情婦もあしてまとひになるといふので殺害した。しかし、かれはすぐ縛について、簡單な裁判ののち死刑を宣告せられ、共產黨の辯護士の理解と同情のうちに、安心立命の境地をみいだして、刑場へひかれていつた。

この小說は非常な好評を博して、1941 年には Wright と Paul Green との共同脚色により舞臺にものぼせられ、Wright はこの作品によつて Guggenheim Fellowship を受領した。たしかに、ものがたりのをもしろさといふ點からみれば、*Native Son* は第一級の作品で、主人公がねずみを撲殺する開卷第一ページから、法廷の場にいたるまで、讀者はをもしろさに、ほとんど卷をおくことができず、いきつくひまもないほどの迫力を感ずるのである。しかし、そのをもしろさは Hollywood 製のスリラー映畫や新派悲劇のそれで、藝術的價値はそれほどたかくない。それに法廷の場にはいつてからは、論告、辯論ともに小說の約束を無視して、不當にながく、理屈つぽくて、まるで小說中に小論文をはめこんだやうな恰好で、技巧の面にもまたおほきな缺陷があるが、さりとてどうにもすてがたいすぐれた箇所も決して二、三にとどまらない。Wright が未完成の作家であるといはれてゐたゆえんである。

Native Son における Wright の主張は、後述する恐怖の說のほかに、黑人の心理狀態を無視した、白人による黑人救濟事業はまとはずれで、無意味である。いかほど多量の金品を黑人救濟事業に寄贈しても、人種間の平等自由を無視してゐては、なんの効果もない、といふことである。Mary Dalton の悲劇は、その平等待遇を、それがあたへられるのを全然豫期してゐないあひてに、あまりに

も唐突にあたへて、あひての猜疑心と恐怖とをかきたてたことにあつたのである。そこに黒人犯罪心理學上重要な事實が展示せられてゐる。

Native Son 發表後、1953年までの Wright の文筆活動は、小説以外の面にかぎられてゐて、雜誌に寄稿した雜文のほかに、1945年には *12 Million Black Voices*（千二百萬黒人のこゑ）といふ、米國における黒人の民俗史風な啓蒙書をかき、1945年には上來たびたび引用した自叙傳 *Black Boy*（黒人少年）を發表しただけであつた。

最近作 *The Outsider*（局外者）は昨春 13 年ぶりに發表せられた長篇小説である。轉向聲明後の第一作であり、非常な期待をもつてむかへられ、事實相當以上に批評家の關心のまととなつたけれども、黒人不遜といつたやうな印象をあたへるところが數個所あるためか、前作ほどに大衆讀者層にくひいることはできなかつた。

The Outsider の根本思想は Wright にとつてはふるいものである。Bigger Thomas はいふた。"We black and they white. They got things and we ain't. They do things and we can't. It's just like living in jail. Half the time I feel like I'm on the outside of the world peeping in through a knot-hole in the fence."[10]（おいらは黒人、やつらは白人さ。やつらはものもちだが、おいらはちがふ。やつらにやいろんなことができるが、おいらにやできねえ。まるで牢屋にはいつてるみてえなものさ。おらこの世のそとがはにゐて、かきねのふしあなから、のぞきみしてるやうな氣がすることがしよつちゆうあるのさ。）これは前世紀末に、白人があらゆる卑劣、陰險な手段をもつて黒人の社會的、經濟的進出をおさへ、「白人の優越」(white supremacy) を確立した結果生じた現象であつて、爾來白人と黒人とはみずしらずの他人同然になり、たがひになにをかんがへてゐるのか本當にはわからない狀態がつづいてゐる。[11] *Native Son* におけるこのやうなかんがへが發展し、人格化せられたものが、*The Outsider* の主人公 Cross Damon である。Chicago 郵便局の整理員、黒人 Cross Damon は人間の弱點をよくこころへた、冷徹、博識なをとこである。かれはしばしば人間

10. Wright, Richard: *Native Son*, I, "Fear" p. 17.
11. *Ibid.*, III, "Fate", p. 297.

の弱點をついたいたづらをして友人をわらはせてゐたが、そのやうなかれも旺盛な情慾だけはどうにもならなかつた。愛人の少女が妊娠したけれども、別居中の本妻は離婚に同意せず、その少女は墮胎に應じない。再婚に成功しなければ、Damon は 15 歳未滿の少女を強姦した犯罪にとはれることになる。進退きはまつてゐるときに、かれは地下鐵事故で死亡したと誤認せられた。それをよいことに、かれは死亡者になりすまして、逃亡せんとしたが、宿泊した淫賣やどで同僚に遭遇したので、計畫の齟齬するのをおそれて、その友人を絞殺して、New York へ逐電した。

New York では、Damon は愼重な用意のもとにそのころ死亡したばかりの同年の黑人青年になりすまし、New York への車中でしりあつた食堂車のボーイで、共產黨員の黑人青年の紹介で、黨員 Gilbert Blount のアパートへ同居した。ところが、そこのやぬしが極端な黑人きらひで、Damon おひだしをはかつたことから、Blount とやぬしとのあいだに猛烈な格鬪がはじまる。その醜狀を目擊した瞬間 Damon は二人——ともに自分の主義のために黑人を利用する二人に憎惡、愼恚を感じて、二人とも撲殺してしまひ、さらにその證據をにぎられた黨員 Hilton をも射殺した。そこで州檢事——Damon が東上の車中面識をえて、人生觀に共鳴した、せむしの檢事——おなじく人生の傍觀者の Houston と共產黨員との事件搜索、Damon のみもと調査がはじまる。事件の眞相をしつた Gil の妻女 Eva は、自分の愛情を共產黨員に惡用せられたうえに、いままた身をまかせた Damon にもうらぎられて、絕望のあまり、自殺した。Houston は Damon の性格を理解し、事件の眞相を把握したが、證據不充分で Damon を起訴できない。共產黨の方は怪物 Damon におそれをなして、Damon を狙擊する。Damon は犯罪の一切を、かけつけた檢事 Houston に告白して絕命する。

Wright がこの小說において、實存主義と Dostoievsky の「罪と罰」の影響をうけてゐることは明白である。そして、Wright が 13 年間に小說家として技巧に相當のみがきをかけたことは、篇中ながながとかたられる Damon の人生觀のあつかひかたをみてもよくわかる。思想的にもふかみをました。しかし、*The Outsider* は *Native Son* にもまして陰慘な暴力小說 (novel of violence) である。400 ページたらずの小說のなかに、前後四回の殺人、一回の自殺をおりこみ、そのうえ列車事故まであつて、まるで全篇の四分の三が血でぬられ、阿鼻叫喚を發してゐるやうで、一つの殺人行爲がつぎつぎに他の殺人行爲をひきおこす契機となつてゐるところは、*Mac-*

beth を髣髴たらしめるものがある。しかし 16 世紀の tragedies of blood とはちがつて、これは naturalism の手法で、それぞれの死の場面が克明に描出せられるので、たまつたものではない。*Native Son* の執筆にあたつては "two murders were enough for one novel."[12]（一つの小説には二つの殺人があれば充分だ）とおもつたといふてゐるのに、これはまた大變な心境の變化をきたしたものである。

Native Son にも殘忍目をおほはせる箇所が若干ある。なぜ Wright がこのやうな小説をかくか、その原因を知るかぎとなる作者のことばがある。*Uncle Tom's Children* 發表後まもなく、それをよんで、同情のなみだにむせんだ讀者があることを知つて、Wright は今度小説をかくときには、"it would be so hard and deep that they would have to face it without the consolation of tears"[13]（激越、深刻で、讀者がなみだでなぐさめられるといふことなしに、對せざるをえない）ものにする、といふてゐるのがそれである。Wright が幼少年時代から經驗してきた、さまざまの人生の不合理が、かれのきもちを左様にまで歪曲したのであつて、かれが人間の殘忍性を故意に强調してゐることがこれでよくわかる。かれが米國における自由平等の思想にうらぎられ、Jim Crow-ism でたたきのめされて生じた saddistic な面が *The Outsider* においては一段と助長せられたのである。共産黨にも絶望し、fascism も宗教も信じられず、現在絶望のどんそこにある作者は、讀者をも不愉快にせねば我慢できないのである。Richard Wright の創作態度はつねに眞摯きはまりないもので、したがつて、ゆとりがない。文章の美や表現の技巧にこらない。その點でもまた、かれは James T. Farrell とよく似てゐる。Cross Damon は作者假想の一種の巨人で、かれは人情を無視し、國法を度外視し、情慾だけ、あるひは生存意慾と情慾とだけで生きんとして、遂になにものにも救濟せられなかつた。このやうな怪物がかりに存在してゐたとしても、この世で幸福でありえないことは明白である。作者は最後にかれを狙擊させて、左様なをとこにすくひのないことをしめしてゐる。*Native Son* 等ではあれほどに讃美した共産主義を、今度は完膚なきまでに筆誅してゐるが、そこに作者のゆとりのない創作態度と正直な性格がよく

12. Wright, Richard: How Bigger Was Born" xlix, reprinted in way of the preface to *Native Son*.
13. *Ibid.*, p. xlii.

あらはれてゐる。かれがこの絶望の悲劇、ゆとりのなさから、いついかにして脱出するかは、非常に興味のあることである。かれがそれに成功するとき、小説家としてのかれに一大飛躍がみられるであらう。

5

Richard Wright 初期の作品の底流をなしてゐる思想は、黒人は白人に對し憎悪と恐怖をいだいてゐて、元來温和な黒人が白人の非道なしうちによつて極端におひつめられ、發作的に犯罪をおかすが、白人はその犯罪の背景を知らず、また知らうともせず、一方的にかつてな處罰をすると、いふのであつた。

米國における黒白兩人種の抗爭のもつともはげしかつたのは 1880 年代と 90 年代とであつた。1882-1936 年間に記錄せられたリンチ 3,383 件のうち過半數が上記の時代にあり、最高の 1892 年度には 160 件をこえてゐる。[14] これは、まえにものべたごとく、黒人の經濟的、社會的進出が白人の貧困階級 (poor whites) を刺戟したためであつた。そこで黒人が一歩をゆづつて、無用の摩擦をさけ、無獣な生命、財産の損失をふせぐために、劣等な地位を甘受して、無抵抗をよそほふやうになると、リンチ件數は漸次減少して、1900 年代には年間 100 件以下になり、1920 年代にはさらに減少して年間 20 件以下となつた。[15] しかし、これは黒人が屈從になれて、無氣力になつたといふのではない。白人のまえではもとめて道化役を演ずる黒人も、實は白人を蔑視し、ひどい憤怒に全身をやきつくされてゐるし、無表情な黒人の心中には、白人の横暴に對するいきどほりの念がもえさかつてゐるのが普通なのである。白人は黒人にはな

14. Frazier, E. Franklyn: *The Negro in the United States*, Chapt. VIII, "New Forms of Accommodation", New York, The Macmillan, 1949.

15. *Ibid., loc., cit.*

にもさせてくれない。それをおもふことに、"I feel like somebody's poking a red-hot iron down my throat"[16]（だれかがまつかにやけたこてを、おれののどにつきさしてゐるやうな氣がするんだよ）といふたBiggerの告白は飛行士になれず、兵役に服せず、就職の機會均等もなく、入方ふさがりだつた黒人少年の悲痛なさけびを代辯したものである。しかしかやうな心理狀態は白人の介意するところではなかつたた。Richard Wrightの小說の評判は、この白人が知らうとしなかつた黒人心理を解剖し、描出してみせ、抗議したところにある。實際、正義人道、自由平等のくにであるはずの米國において、黒白兩人種間にはそれがない。黒人はしばしば法のそとにある。そこで黒人はつねに緊張、不安のもとにあり、職場では不斷に不當馘首の可能性に威嚇せられ、白人の不興をこほむる不安におびえ、リンチの恐怖におののく。そしてその恐怖が嵩じると、發作的犯罪、殺人行爲となることがある。"Long Black Song"のSarahはかんがへた。"White men killed the black and black men killed the white. White men killed the black men because they could, and the black men killed the white men to keep from being killed.[17]（白人が黒人を、黒人が白人をころした。白人は黒人をころせるから、ころしたんだけど、黒人はころされたくないから、白人をころしたのだよ。）そしてかの女の良人もまたかやうな宿命的關係のなかにあつて、自暴自棄となつて、みづから死をもとめた。白人は事件を警察に報告しないで、群衆をよんでリンチをしようとしたのである。このやうなばあい、黒白兩人種ともに法治國民としての節度がない。Richard Wrightはその實狀を忠實に描寫して、米國民の良識にうつたへたのであつて、かれはHarriet Beecher Stoweにまさるともおとらぬしごとをしてゐるのである。

1930年代以後米國における黒人の地位が急速に改善されBigger Thomasの不平のおほくが解決せられてゐることは事實であるが、さりとて、その原因をWrightの文學活動の結果だけに歸することはできない。なぜならば、その現象はWright出現以前にすでにはじまつてゐるのであつて、C. I. O.は1935年11月9日に人種・皮膚のいろの相異によつて差別待遇をしないことを規約に採

16. Wright, Richard: *Native Son*, I, "Fear", p. 17.
17. Wright, Richard: *Uncle Tom's Children*, III. iii. p. 101.

擇してをり、また Erskine Caldwell (1903-) も同年 *Kneel to the Rising Sun* (旭日をおがむ) を發表して、標題小說および "Saturday Afternoon" (土曜日の午後) の兩篇において、リンチの非人道性を曝露して、Wright の諸作の先驅をなし、讀者に多大の感銘をあたへてゐるのである。ことに、"Saturday Afternoon" においては、リンチの直接描寫はないが、その見物にコカコラをうりにゆく商人が配されてゐるところに、なんともいへぬ効果があがつてゐるのであつて、このやうな間接描寫のすばらしさは、Wright にはみられない。Wright は左翼思想が擡頭して、米國社會の缺陷を曝露し、抗議することのはやつた時代の風潮にのつて出現し、黑人なるがゆえに、白人作家には到底およびがたい境地を打開し、あたらしい黑人の型をつくりあげたところに、最大の價値がある。

戰時になつてからは、どこのくにでもおきまりの勞力不足のため、黑人の歡心をかふ必要があつた。1941 年 6 月 25 日に連邦雇用公正委員 (Federal Fair Employment Practices Commission) がまうけられ、產業界における雇用の不公平を除去する努力がはらはれるにいたつたのも、その一つのあらはれである。戰後には大戰の原因の探求による反省もくははつて、黑人に對する不公平措置是正の機運がますますつよくなるとともに、黑人軍人復員者の職業調整の問題もでてきた。Sinclair Lewis 晚年の佳作 *Kingsblood Royal* (人名) (1947) はそのやうな時期に發表せられたものである。1947 年には大統領直屬の人權委員會 (Committee on Civil Rights) が、いかなる形式をとはず、すべて黑人排斥 (segregation) を廢止すべきことを要求し、最近はまた公立學校における黑人子弟排斥が米國憲法違反であることが大審院判決となつて、交通機關、住所、學校の各方面において、黑人は徐々に平等の待遇を獲得し、米國憲法改正第一三、第一四の規定がやうやく實施されはじめてゐるが、この變化を促進するにあたつて Richard Wright の諸作品が貢献するところがなかつたとはいへない。

最後にもう一つみのがしてならないことは、Wright の小說の主人公は、たとへ殺人犯人であつても、全然悔悟の念のないことである。かれらには舊來の道德律はあてはまらない。Bigger Thomas は、自分が人間なみのいきかたをさせてもらへさうにもなかつたので、くるしまぎれに殺人をすることになつたので、犧牲者には氣の毒なことをしたけれども、わるいことはしてゐない。いな、自分の

したことはただしかつたとおもひ、だれをもゆるさず、だれにもゆるしをこはずに處刑せられた。[18] Cross Damon もまた、たとへ發作的に殺人をしたときにも、すぐ冷靜を恢復して、司直のてをのがれるために、つぎの殺人を計畫し、證據湮滅に專念する。このをとこは Nietzsche, Hegel, Jaspers, Heidegger, Hussel, Kierkegard, Dostoievsky の愛讀者で、キリスト教道德を超越してゐて、Wright の他の人物にみる恐怖心さへもない。自分が自分の性格と思想のゆえに、人生の正道をふみはずして、ゆくてのくらさに氣づいたとき、おどろき、狼狽しただけである。Bigger Thomas の方はまだ幼稚であるが、"I wanted to be happy in this world, not out of it"[19] (この世でしあはせになりたかつたんで、あの世でぢやありません) といひ、黑人はみな信仰をするが、"it don't get 'em no thing. The white folks got everything."[20] (かれらになんの得にもなりやしない。みんな白人にとられちやうんだ) といふところに Damon へ發展する胚芽がある。Damon は Wright が幼年時代から强制せられた劣等感が反動的に創造した怪物である。

要するに、Richard Wright は、歪曲せられた米國南部の黑人社會がうんだ一種の病める秀才、ひがんだ秀才である。その意味において、かれはその私淑する Dostoievsky にちかいところがあり、實際かれはしばしばこのロシアの大作家と比較せられるけれども、Dostoievsky とちがつて、Wright はその性格上の缺陷がかれの作品に惡作用をなしてゐて、かれにとつておほきなマイナスになつてゐるやうである。フランスに在住し、フランス文學に直接接することがかれの作品にどのやうな好影響をおよぼすか、期待されるものがある。

——おはり——

18. Wright, Richard: *Native Son*, III, "Fate", p. 358.
19. *Ibid.*, p. 302.
20. *Ibid.*, p. 301.